

# お茶うけ 第70話

## 子どもとおモチャ

この夏半年ぶりに、1歳6か月の孫が鹿児島からきて、わが家に2晩泊りました。私は、この短い限られた時間の中で、孫とできるだけ長く一緒に遊びたいと考え、二人で工夫しながら遊べる簡単な「おもちゃ」を用意することにしました。いつも孫は大ぶりのレゴを箱や袋に入れたり出したりして遊んでいると聞いて、コップに敷くコースター6枚と小さなプラスチックのカゴ1個を組み合わせたものと、スポンジのボール2個と小型のプラスチックのバケツ2個を組み合わせたものを用意しました。

幸い孫はどちらも気に入ってくれました。カラのカゴにコースターを1枚づつ入れ、手持ちが無くなると、カゴからコースターを取り出して、また1枚づつ入れることを繰り返して遊びました。コースターを入れるときにカゴの縁に当たって遠くに跳ねたものを拾うのが、私の役目でした。

次に、2個のボールを見つけると、両手に一つづつ持って高く掲げてから2つのバケツに同時に落とし込みます。成功する度に私が「じょうず、じょうず」と手を叩くと、孫も自分で手を叩いて喜びます。孫は、このバケツとボールの遊びを飽きることなく繰り返していました。



そばで見ていた孫の伯父に当たるMさんが、ボールとバケツに「おしぼりトレー」を加えた新しい遊びを考えついて、孫の前でやって見せました。それは、竹で編んだ「おしぼりトレー」(以下トレーと略します)の窪みにボールを載せ、トレーの端からボールをバケツに落とし込むものです。Mさんが繰り返す手の動作を不思議そうに見つめていた孫は、やがて手を伸ばしてトレーを持ちました。

孫は、ボールを載せたトレーを手で操って、その端からボールをバケツに落とし込もうとしますが、難しく何度も失敗しました。やがて、コツを覚えたのか、遂にボールをバケツに落とし込むことができました。そのとき孫はからだ全体で喜びを表しました。孫は、トレーという道具を使ったボール遊びが気に入ったと見えて、この少し複雑な遊びを失敗しながらも、いつまでも繰り返して遊んでいました。

この年頃の子どもたちは手が少し器用になって、積み木のような単純な形のものを、積んだり、組み合わせたり、箱などから出し入れする遊びを好むようです。

私の孫も、プラスチック製の手で押して歩く自動車の腰掛けの「ふた」がパカッと簡単に開くのを見つけると、腰掛けのスペースの中に茶筒やボールや玩具のガラガラを出したり入れたりして遊んでいました。

『かしこいおもちゃの与え方 - あふれるばかりのおもちゃの中で -』の本は、1歳前後の子供たち向けの遊び道具として「ポスト・ボックス」を紹介しています。ポスト・ボックスは、開け閉めできる「ふた」がついた箱の中に、数個の積み木を入れたものです。子どもたちは、ふたを開けて積み木を出し、積み木を入れてふたを閉めて遊びます。

ヨーロッパやアメリカで売っているポスト・ボックスは、1歳の赤ちゃんでも遊べるように、ふたが簡単に開け閉めできるようですが、日本で売っているポスト・ボックスは、ふたの開け閉めが少し複雑で、2歳ぐらいからしか遊べないようです。私は、物を出し入れするポスト・ボックス型の遊びは、1歳前後から1歳6か月ぐらいのころの子供たちに、もっとも適していると思うので、少し残念な気がします。

私の子供たちもそうでしたが、一般に子どもは買い与えたおもちゃよりも、家庭用品などの日常の小道具をひねくりまわして遊ぶことが好きなようです。そして、子どもが遊んでいるとき、周りにいる大人たちの役目は、子どもがどのおもちゃに興味を持っているかをよく見て、楽しく遊ぶヒントを与え、集中して遊びつづけられるように手助けすることのようです。

以上

参考文献:

『かしこいおもちゃの与え方 - あふれるばかりのおもちゃの中で』

岩城敏之著 京都・法政出版刊

『育児の百科』 松田道雄著 岩波書店刊